現地取材班の葛藤も含めてこそ、「震災報道の真実」と思う

店頭で本の帯の「テレビ報道の裏側　震災報道の真実！」が目に止まり、書籍「僕はしゃべるためにここに来た」を購読した。

著者は朝の TV のワイド情報番組でリポーターを担当している民放の局アナであり、震災の日の夜に東京を発ち、仙台の系列局を拠点にして翌日から津波被災地域から８日間レポートを放送し、以後も頻回に被災地に入り、震災１ケ月目に上司から「民放・NHK を通じて、リポーターでは、一番長く現地取材に行っているんじゃないか」と言われる程、現地取材に拘った。

情報番組で現場からのレポートを担ってきただけに、まだ行政もボランティアも支援の体制が整わなかった震災直後の被災地や被災者の様子を、番組の語り口調で書かれているので臨場感や迫力があり、一気に読み終えた。

被災地や被災者の取材を続ける中で、「真実を伝えるのが報道」と自覚しつつも、取材しても報道しなかったこと、現場を見てもカメラを回せなかったこと等、「人して行動すべきか、報道人として行動すべきか」の葛藤と苦悩の決断を何度も迫られる事象や、現場取材班と局の番組編集部署とのぶつかり等も語られていた。

自分も震災に遭遇したが、震災直後は全てのライフラインがストップし、情報はラジオで耳にしていたが、津波被災の悲惨な状況を実感的に分かったのは、やはり電気が回復し TV 画面を見た震災５日後であり、ガソリン不足から津波被災地を始めて目にしたのは、約１ケ月後であった。

当初は津波被害の全般的な報道が多く、被災者の詳細な様子までの報道ではなかったような気がするだけに、あの当時のあの報道下での被災地、被災者の臨場感ある様子を、本書で始めて目にするようなこの感覚…。

災害被災地取材では、被災地や被災者に迷惑をかけないという鉄則があるようで、食料・水はもちろん自前で準備・持参するが、被災地域は水洗トイレの水も出ないだろうし、避難場所のトイレは数が少なくて避難者自身が不自由しているのでトイレを借用しないということで、現場取材者用に紙おむつまで局が準備していたとは……。

著者は本書を「覚悟を決めて書いた」というが、取材班の葛藤、苦悩、辛苦の様子も含め「震災報道の真実」と思うのだが…。

阿部幸泰　（2011 年 11 月 29 日　記）